


 スタッフルーム
Staff room

日々のメモ - 育児日記からの延長 -

 さとう ゆりえ
佐藤友里恵

(信濃町メディアセンター主任)

その日の出来事、考えたことをメモするようになって約17年が経過した。元々忘れっぽいたちで、授業のノートは試験に備えてまめにとっていたし、議事録を書く必要があれば打合せのメモも同様である。そのためか筆まめという印象を持たれることも多かったのだが、日常の一言を書き連ねていく日記というものはなぜか続いたことがなかった。手紙や交換日記であれば「相手に渡さなければ」という勝手な使命感から案外長く続いた記憶があるのだが、誰のためでもない日記となると「継続」とは無縁であった。

現在継続中の日記の始まりは妊婦検診だった。胎児が成長していく様が面白く、つい観察日記のようにメモをとっていたのだが、日常化したのは産後からである。入院時に育児日記用のノートを配られて、新生児の睡眠・授乳・便の様子などを記録した。その後、入園してからは連絡帳なるものに移行して、休日を除いて5年間ほぼ毎日書き続けた。産後から卒園までは義務で行ってきたようなものである。途中で第2子も加わり、2冊並行となり面倒くささも倍増した。

さて、入学したらもう毎日書く必要はなくなるはずだった。ところが、ここでぶつっと成長記録が途切れることに不安を抱いてしまったのである。ここまで続けてきたら急にやめるのももったいないという意地もあって、日々の様子を記録に留めておこうと手帳に書くことにした。育児日記の延長なので、仕事のことには原則触れない、というのが自分なりのルールである。あとは特に決めているわけではないのだが、毎日必ず決まった量(行数)を埋めている。手帳がカレンダー式であるためか、1行でも空いていると妙な几帳面さが災いして落ち着かない気持ちにさせられるのだ。損な性分だと思ってしまう。

仕事以外の出来事、子どもたちに関することから題材を選んでいるが、特に変わったことが

なかった日もなんとか絞り出して無理やり膨らませて4行埋める。書ききれないほどの出来事があった日は取捨選択をして4行書き、捨てきれない事柄があれば記憶に直結しそうな言葉を片隅に書き散らしている。後でこれはいったい何のことだったかと首を傾げるものも当然あるのだが、多くはその時の様子や自分の感情などが鮮やかに思い出される。子どもならではの言い間違いや勘違いなどは逃さず記録しておいて、折に触れ話のネタにしている。(いやな親だ。)体調の変化や学校行事や部活動で、前回はいつだった?去年はどうしていた?など、今では記憶力の低下を補って案外役立っている気もする。

第1子は高校生になっているので、ずいぶん長い間続いていると我ながら感心する。では、やめるのはいつだろうかと少し先のことを考えてみた。あと数年経ったら子どもたちは成人となって巣立っていく(はずである)。そうすると「記録を残さなくてはい」というひそかな使命感もなくなるだろうから、自然に終息していく気がする。これまで重ねてきた日記帳・手帳はどうしたらよいだろうか。処分の仕方を考えながら、もうしばらく書き続けていくことになるのだろう。

文字数に余裕があるので、別の日常的なメモについても少し書いてみよう。一つは図書館から借りた本のリストである。購入するよりも図書館で借りる方が多く、手書きの「My Library」のような役割を果たしている。図書館を利用している限りは続くのだろう。過去に読んだ本をまた借りてしまうことが時々あるが、それはそれでよしとしている。もう一つは毎日の業務記録で、確認してみるとこちらも20年近く続いている。業務報告や引き継ぎが必要となったときのために事細かにつけているのだが、肝心なことが抜け落ちていたりする残念感が拭いきれない。しかし、それもまた私らしいのだと思うようにしているのである。